

子どもの死の意識と経験

——長崎を中心とした調査研究——

上 菌 恒太郎

Todesbewußtsein und Erfahrung
von Kindern und Jugendlichen

—— Untersuchung in Nagasaki ——

Kohtaro KAMIZONO

I. はじめに

子どもたちは、死に関わる経験をどの程度もっているのでしょうか。身近にある経験量は年齢とともに増えるとしても、死に関わる経験として意識される事柄に差があるのだろうか。子どもたちは、「かわいそう」という、死に対して一般的な感情表現を何に対して使うのだろうか。子どもたちは、死に関わる経験から死について誰かに尋ねるのだろうか。尋ねることがなければ、事実にとどまらない死の意味、それは文化だと思うが、を受け継いでいるのだろうか。本稿では以上のような点について、長崎を中心とした3歳から18歳、および大人として20歳に関する調査¹⁾をもとに論じる。

本稿で取り上げた経験は、経験の意識であり、おもに、動物の死骸を見たという意識、ペット相当の動物との死別経験、死者を見たという意識の3点である。調査票における質問項目としては、「死んだどうぶつを見たことがありますか?」「なかのよかった どうぶつが死んだことがありますか?」²⁾「死んだひとを見たことがありますか?」である。

そのほか「どうぶつが死ぬのとひとが死ぬのとどちらがかわいそうですか?」「死ぬのはいやだとおもったことがありますか?」「きれいな(美しい)死があるとおもいますか?」の項目とのクロス集計についても扱う。

II. 経験と年齢

経験の意識を問う上述の3つの質問項目の結果を年齢別に掲げる。それぞれ表および図を示す。

II-1. 死んだ動物を見た経験

本調査で取り上げた死に関わる経験のうち、動物の死骸を見た経験は、経験したと意識しているか否かを問うことになっている。したがって経験の量的増加だけではなく、関心の程度を含む。関心があれば見るし、記憶に残る。筆者が以前に子どもの死の意識を論じた際に、12、13歳は、何が死かの判断については9歳よりも拡散する傾向を示し³⁾、常識的と考えられる判断から比較的遠いことが明らかになっていた⁴⁾。ところがここでは12、13歳あたりの数値は高く、関心が低くないことを表していよう。この年齢段階では、関心をもって多様な判断をしている、死についていろいろなことを考えていることを示していると考えられる。

5歳から7歳の、死んだ動物を見た経験の急激な増加は、死に関する関心の高まりを示すと思われるが、生活圏の拡大による経験量の増加を含むのであろう。その背景には死の概念の明確化が進行しており、死んだ、という判断の基準を獲得していつていることがうかがえる。⁵⁾

表 1

死んだ動物を見たことがありますか				
年 齢	は い	わからない	無回答	いいえ
3歳	56.1%	0.0%	0.0%	43.9%
4歳	52.8%	1.9%	0.0%	45.3%
5歳	60.2%	0.5%	0.0%	39.3%
6歳	74.9%	0.0%	0.0%	25.1%
7歳	82.9%	0.0%	0.3%	16.8%
8歳	85.0%	0.0%	0.3%	14.7%
9歳	85.9%	0.0%	0.5%	13.6%
10歳	90.0%	0.0%	0.0%	10.0%
11歳	90.4%	0.0%	0.0%	9.6%
12歳	93.8%	0.0%	0.6%	5.6%
13歳	96.1%	0.0%	0.2%	3.7%
14歳	93.6%	0.0%	0.3%	6.1%
15歳	96.1%	0.0%	0.0%	3.9%
16歳	95.6%	0.0%	0.5%	3.9%
17歳	93.4%	0.0%	0.0%	6.6%
18歳	95.6%	0.0%	0.0%	4.4%
20歳	99.1%	0.0%	0.0%	0.9%
全 体	87.2%	0.1%	0.2%	12.5%

経験の増加について、年月を経ることによる、つまり年齢による増加、生活圏の拡大による増加、関心による増減、の3つの要素を考えてみたい。そのうち、生活圏の拡大ないし移動による死に関する経験量の変化は、年齢の低いところでは大きな意味をもつと思われるが、ある程度の高年齢で生活圏の拡大、変化、移動によって死に関わる経験が拡大することは少ないのではないか。戦争状態などへの生活の変化を、調査対象となった子どもたちはもたない。本論では生活圏の変化による死の経験の増加は、幼児期を除いて、加齢にともなう変化として一括して考

えた。年齢段階による死の経験の増加、ある年齢段階に達すると知人の死などに多く接するようになるなどは、20歳段階までの場合考慮しなくてもよいと判断できる。経験の意識について問う本調査の場合、関心による差、個人が経験したと意識しているか否かが大きいだろう。それは個人差にもなるが、本調査では対象者数によって個人差を越えて年齢段階による変化を論じることができよう。(各年齢の調査対象者数については、註1の表に示した。)

死んだ動物を見たことがあると答える者の割合と年齢との相関をみると、両者は高い相関関係にあることがわかる ($r=0.87$)。死んだ動物を見たという印象は、経験が日常的であるから、どこかで見たことがあるという印象が残る、経験が蓄積するのであろう。しかし6、7歳で経験としての意識が高くなるのは、関心が強くなることによると考えられる。小学校中学年あたりまでは、死んだ動物を見たという意識は、どこかで見たことがある気がするというものではなく、どこで何の遺骸をみた、どのような状態であったという観察を含んでいる。

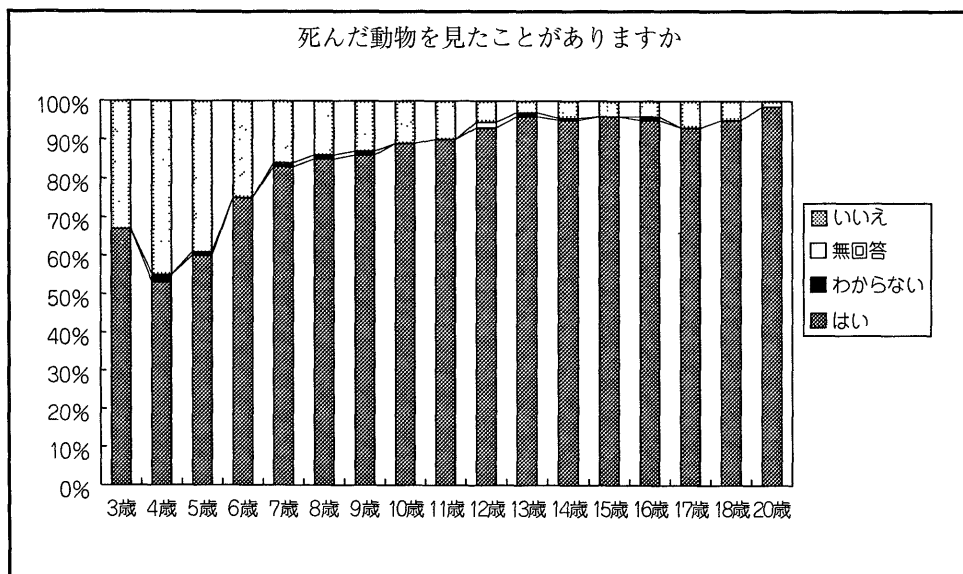


図 1

II-2. ペットとの死別経験

表 2

仲のよかった動物が死んだことがありますか				
年 齢	は い	わ かり ない	無 回 答	い い え
3 歳	49.1%	10.5%	0.0%	40.4%
4 歳	28.6%	5.6%	1.9%	64.0%
5 歳	29.4%	3.8%	2.4%	64.5%
6 歳	44.5%	5.3%	0.0%	50.2%
7 歳	44.0%	0.6%	1.2%	54.3%
8 歳	51.3%	0.9%	0.0%	47.8%
9 歳	43.2%	0.5%	0.5%	55.8%
10歳	39.8%	0.9%	1.9%	57.3%
11歳	42.5%	0.6%	0.6%	56.3%
12歳	47.2%	0.6%	1.1%	51.1%
13歳	43.1%	1.7%	0.2%	54.9%
14歳	43.1%	1.7%	0.7%	54.5%
15歳	43.3%	0.3%	0.0%	56.4%
16歳	35.9%	0.0%	1.5%	62.6%
17歳	47.6%	0.0%	0.6%	51.8%
18歳	44.1%	0.0%	1.5%	54.4%
20歳	63.6%	0.0%	0.0%	36.4%
全体	44.3%	1.5%	0.7%	53.5%

ペットとの死別経験について、宮本一史らが1981年に東京でおこなった調査によれば、「(小学校4年生から中学校3年生のうち)自分が可愛がっていた動物に死なれてしまったことがある子どもは…約65%である」⁶⁾という。長崎を中心とした本調査における当該年齢(9歳から14歳)の割合は、ほぼ4割台前半で、少ない。その要因として調査の十数年の違い、東京と長崎の地域の違いなどが考えられるが、わからない。

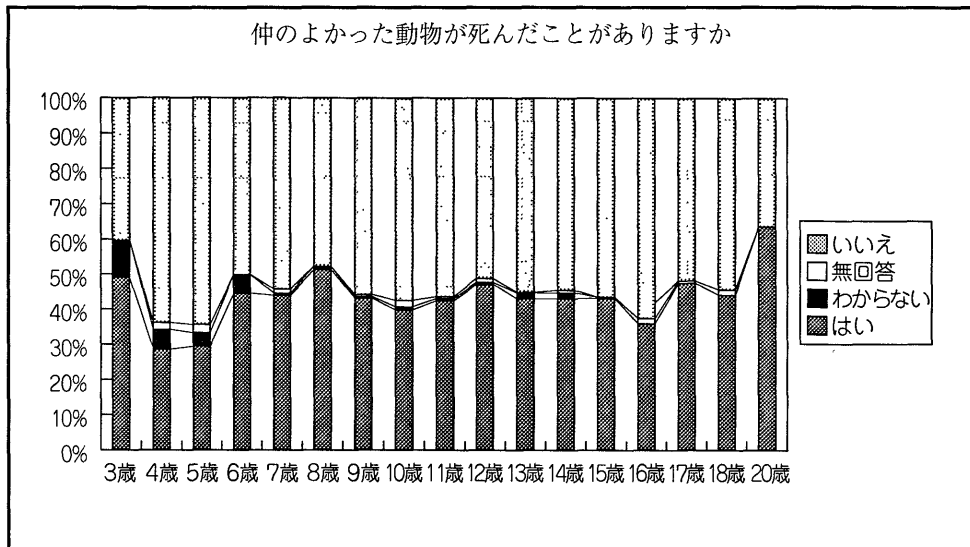


図2

仲のよかった動物との死別経験がある者の割合と年齢との相関は、あるが高くはない ($r=0.44$)。経験の量は年齢とともに増えるはずであるが、図2が横這い状態の印象を与え、また高校生あたりでむしろ低く見えるのは、ペットとの死別経験があったとしても印象が時とともに薄れる、ないし死に関わる経験として目下の意識に組み込まれていないということであろう。それぞれの年代の当面の関心の差を要因として認めることができるかもしれない。さらに、何が死別経験として意識されるかは対象によるという点もあろう。落葉は多くの場合死の経験として意識されないが、身近な人の死は経験として意識され、記憶に残る。仲のよかった動物との別れは、意識されるべきことであるが、また記憶の彼方に消えていくべきことでもあるのではないか。

仲のよかった動物との死別経験に関する問いは、記憶の具体的内容を思い起こすことによって回答することになるようだが、死んだ動物一般を見たことがあるか否かは、経験内容の記憶にかかわらず、経験があるという記憶、いわばメタ記憶で答えることができる。経験の累積があるという記憶で答えることのできる死んだ動物についての問いよりも、仲のよかった動物との死別経験は、回答のしかたが個別事例の内容記憶に傾き、必ずしも累積しないのではないか。この2つに対して、人の死は、印象に残るだけでなく、記憶に残り続ける、生の節目ごとに意味を問い直し続けるような記憶なのだろう。つまり、年齢とともに経験の量が増えるだけでなく、残り続け、累積する。人との死別経験が、3つの問いのなかでは、年齢との相関が最も高い。

II-3. 死者を見た経験

表3によって9歳から14歳を取り出してみると、死んだ人を見た経験は41.2%から70.2%のあいだにあり、12歳が最も高い値を示している。宮本一史らの調査における当該の設問⁷⁾に対する答をみると、47.9%から63.8%のあいだで推移しており、中学校1年生が小学校4年生から中学校3年生のなかでは最も高い点をふくめて、本調査と同様である。

表 3

死んだ人を見たことがありますか				
年 齢	は い	わからない	無回答	いいえ
3 歳	52.6%	5.3%	0.0%	42.1%
4 歳	42.2%	3.7%	0.6%	53.4%
5 歳	36.5%	1.9%	0.5%	61.1%
6 歳	40.5%	1.2%	0.4%	57.9%
7 歳	45.7%	0.0%	0.0%	54.3%
8 歳	44.6%	0.3%	0.3%	54.8%
9 歳	41.2%	0.0%	0.0%	58.8%
10歳	56.9%	0.5%	0.0%	42.7%
11歳	56.9%	0.0%	0.0%	43.1%
12歳	70.2%	1.1%	1.1%	27.5%
13歳	62.5%	0.2%	0.2%	37.0%
14歳	68.0%	0.7%	0.0%	31.3%
15歳	69.6%	0.5%	0.0%	29.9%
16歳	72.8%	0.0%	0.5%	26.7%
17歳	75.3%	0.0%	0.6%	24.1%
18歳	76.5%	0.0%	0.0%	23.5%
20歳	85.2%	0.0%	0.3%	14.5%
全体	58.9%	0.6%	0.3%	40.3%

3, 4 歳が高い数値を示すのは、彼らにとって死んだ人という概念があいまいだからだろう。9 歳が最も、〈石は死なない、タンポポ、木、犬、クジラ、大人、自分は死ぬ〉という「常識」型で答えるが、また人との死別経験が 5, 6 歳の次に少ないと答えているのは興味深い。おそらく 9 歳という年齢までに、人との死別経験という、いわゆる大人概念規定が明瞭になるのであろう。死んだ人を見た経験がある者の割合と年齢との相関は、非常に高い ($r = 0.92$)。

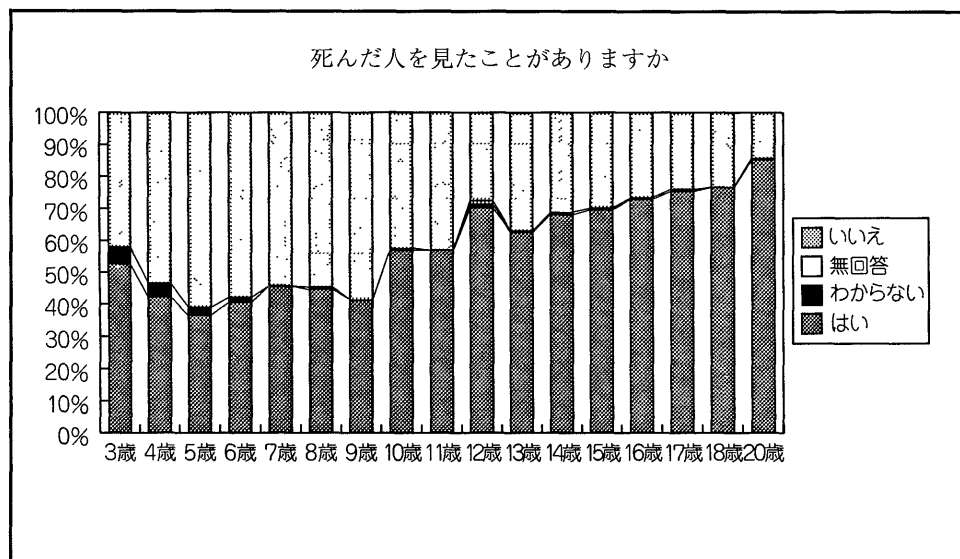


図 3

Ⅲ. かわいそうな死

「どうぶつが死ぬのとひとが死ぬのとどちらがかわいそうですか?」という質問に(どうぶつ ひと どちらもかわいそう)から選んで答えてもらった。

この設問の背景には、日本の子どもたちが死について語る際の特徴として感情を表す言葉を多用する点があり、「かわいそう」という死についてコメントする場合に最もよく使われる表現について対象を問うことになっている。「死について『感情』の問題として応答する点が、日本の子どもたちの特徴であろう」と筆者はかつて論じた⁸⁾が、何を「かわいそう」という言葉の対象とするのだろうか。

表 4

動物が死ぬのと人が死ぬのとどちらがかわいそうですか					
年 齢	動 物	ひ と	ど ち ら も	両方ともかわい そうじゃない	無記載/ わからない
3 歳	56.1%	19.3%	8.8%	0.0%	15.8%
4 歳	54.0%	17.4%	19.9%	0.0%	8.7%
5 歳	38.4%	21.3%	34.6%	0.5%	5.2%
6 歳	18.6%	31.6%	45.3%	0.4%	4.0%
7 歳	5.9%	28.0%	64.3%	0.3%	1.5%
8 歳	3.2%	12.0%	83.9%	0.0%	0.9%
9 歳	1.5%	3.5%	94.0%	0.0%	1.0%
10歳	1.4%	5.7%	92.9%	0.0%	0.0%
11歳	6.6%	4.8%	88.6%	0.0%	0.0%
12歳	7.9%	7.9%	82.6%	0.6%	1.1%
13歳	6.1%	13.2%	78.9%	1.2%	0.5%
14歳	9.4%	12.8%	75.8%	0.7%	1.3%
15歳	7.2%	12.1%	78.9%	0.8%	1.0%
16歳	5.8%	18.4%	73.3%	0.5%	1.9%
17歳	10.2%	15.7%	71.1%	1.8%	1.2%
18歳	10.3%	22.1%	66.2%	0.0%	1.5%
20歳	4.5%	17.9%	73.6%	1.5%	2.4%
全体	11.1%	15.5%	70.8%	0.6%	2.0%

宮本一史、宮本裕子らも動物の死と人間の死とどちらがかわいそうかを、幼稚園(5歳)児、小学校1, 2, 3年生に問うている。それによれば、「動物がかわいそう」が幼稚園児段階から小学校2年生までに著しく減少し(51.2%から7.4%),「両方ともかわいそう」が著しく増加(25.6%から72.0%)する⁹⁾。

同じ傾向が本調査でも現れる(表4および図4)。「どうぶつがかわいそう」とする5歳38.4%は7歳で5.9%に減少する一方で、「どちらもかわいそう」とする5歳34.6%は7歳で64.3%に増加する。図4を見ると、「どうぶつ」「ひと」「どちらも」が交錯するのは、5歳と6歳の間である。以後、9歳まで同様の増加、減少傾向が続く。

「どうぶつ」「ひと」「どちらも」の図4における各項目線の上位2つの年齢を取り上げると、3, 4歳から6, 7歳さらに9, 10歳と移行していく。このことから、死んでかわ

いそうなのは、動物から人、さらに双方ともというように変化していくと読みとれよう。

しかし「どちらも」は9歳をピークに次第に減少し、「どうぶつ」は9、10歳が最低値、「人」は9歳を最低値としてわずかながら上昇傾向を示す。9歳前後という年齢の、3歳から20歳代における位置は、何が死ぬものであるかの判断の型の動きと符合する。すなわち9歳は〈石は死なない、タンポポ、木、犬、クジラ、大人、自分は死ぬ〉といういわば常識的な判断を示していた¹⁰⁾。死についての判断はいったん9歳あたりで確立されるのではないかと論じておいたが、もし「どちらもかわいそう」という答が「大人らしい」答だとするならば、9歳前後はかわいそうな死についての考えかたをステレオタイプ化されやすいところで一度確立するのではないか。そして9歳前後で一つの形をとった死についての考え方がさらに年月を加えるにつれて、ここで扱っている点についていえば、どちらもかわいそうだがどちらかといえば人間と答える思考が加わるということになる。

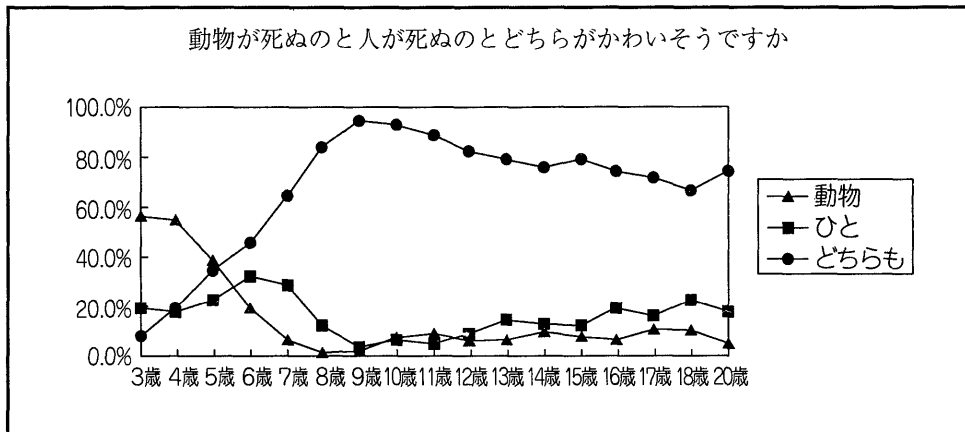


図 4

IV. 経験と問い

子どもたちは、経験に惹起されて、死について誰かに尋ねるのであろうか。死が、事実にとどまらず、意味の問題であるならば、意味づけによって死とは何かを理解するということになるから。

調査の結果は、子どもたちが死についての問いを、死に関わる経験から誰かに発するわけではないことを示している。子どもたちは、死んだ動物を見ても、仲のよかった動物が死んだ経験があっても、死んだ人を見たことがあっても、死ぬのは嫌だと思ったことがあっても、死ぬとはどういうことが自分から誰かに尋ねるわけではない。死んだ動物を見たことがあるか否かと、死ぬとはどういうことか自分から誰かに聞いたことがあるか否かととは、有意差はない ($df=1.42 \times 10^{-5}$)。死んだ動物を見たことのある者のうち、78.8%が死について自分から尋ねたことがないと答えている。仲のよかった動物が死んだという経験があるか否かと、自分から尋ねるか否かはつながらない ($df=1.22 \times 10^{-23}$)。ここでもペットとの死別経験がある者のうち73.0%が尋ねていない。死んだ人を見たことがあると答えても、死ぬとはどういうことか尋ねるわけではない ($df=1.48 \times 10^{-10}$)、76.5%が尋ねていない。死ぬのが嫌だと思ったことがある者も、人に尋ねたわけではない ($df=1.37 \times 10^{-12}$)、77.3%が尋ねていない。

調査対象者総数の79.6%が、死ぬとはどういうことが自分から誰かに尋ねたことはないと答えているが、この数字の多さは、死に関わる経験があったとしても質問しないことが関わっている。聞かない要因として「日本で親子の対話が比較的少ない点や、深入りを避ける友人関係のあり方」¹¹⁾を指摘しておいたが、死に関しては尋ねにくい、一般にタブー視されているということであろう。

以下に2つの図を死に関わる経験があっても人に質問しない例として掲げる。図5と6の設問が経験についてであるという点からすれば、経験量は年齢とともに増加していいが、そうはなっていない。思春期に向かうほど尋ねなくなるようにすら見える。とはいえ、両図のピークは、9、12、20歳あたりに見られる。関心の程を表すのであろう。

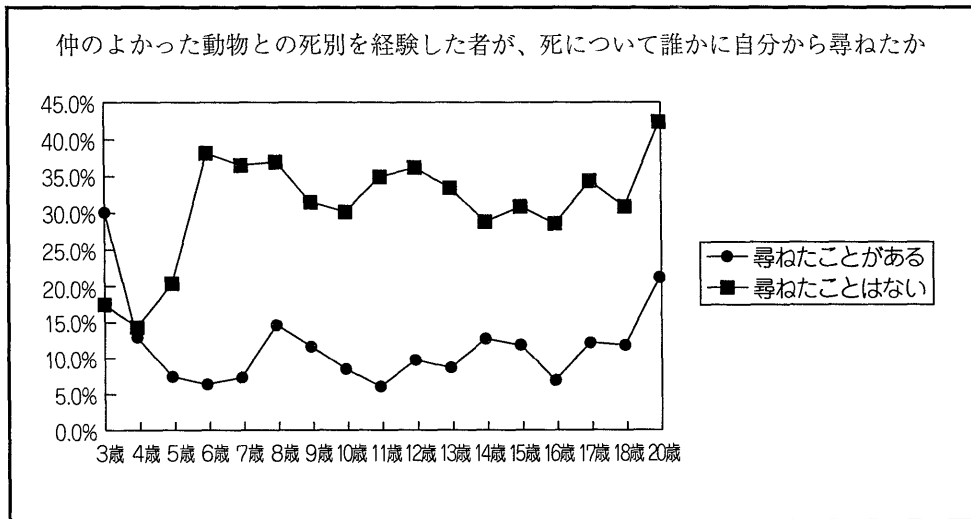


図5

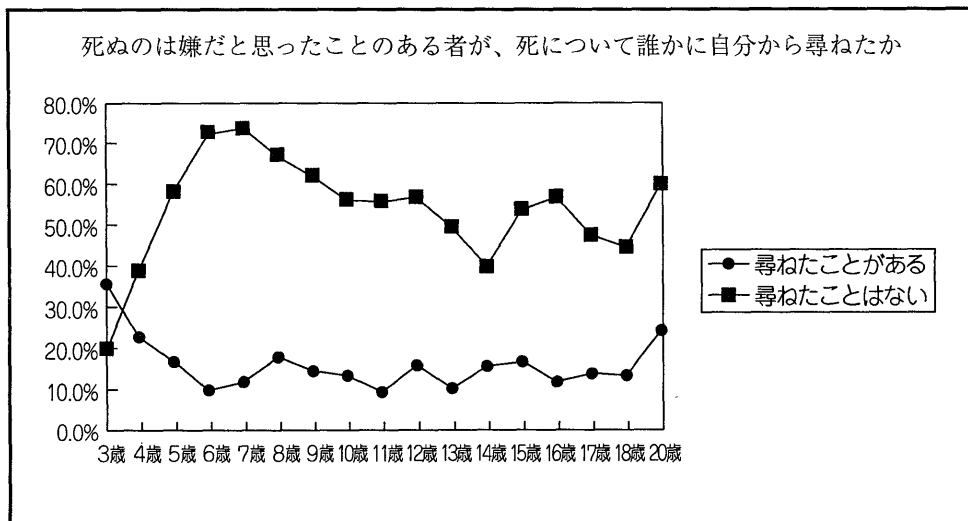


図6

V. 体験とかわいそうな対象および美しい死

ペットとの死別経験、死んだ人を見たことがあるかは、動物と人のどちらをかわいそうと思うかと、統計上関連は見いだせない。仲のよかった動物が死んだことがあるか否かと、動物と人のどちらをかわいそうと思うかとは関連がない ($df=6.55 \times 10^{-6}$)¹²⁾。また、死んだ人を見たことがあるか否かと、動物と人のどちらをかわいそうと思うかとは関連がない ($df=0.0052$)。

美しい死があると思うかどうかと、ペットとの死別経験、死んだ人を見たことがあるか、動物と人の死のどちらをかわいそうと思うかとのつながりは、統計上見いだせなかった。仲のよかった動物が死んだことがあるか否かと、美しい死があると思うか否かは関連がない ($df=1.55 \times 10^{-16}$)。死んだ人を見たことがあるか否かと、美しい死があると思うか否かは関連がない ($df=7.37 \times 10^{-15}$)。動物が死ぬのと人が死ぬのとどちらがかわいそうだと思うかと、美しい死があると思うか否かは関連がない ($df=0.0014$)。死ぬのは嫌だと思ったことがあるかどうかと、美しい死があると思うか否かとは、死ぬのが嫌だと思ったことがある子どものうち、美しい死があると思うものが34.3%、思わない者が30.1%で、関連はない ($df=9 \times 10^{-7}$)。

VI. おわりに

関心による死の意識化と概念の明確化の過程を推量してみると、6歳で関心が高く、この年齢以後人に尋ね、9歳で大人流の判断を下すようになり、12歳からの関心の多様な高まりをへて20歳に至るように見える。死に関わる経験はあっても、子どもたちは自分から尋ねることはない。死に対する子どもの関心と体験は、死生観を話す場に直接つながっていない、大人との対話によって支えられていない。それはタブー視を含めた大人の側の問題ではないか。

註

1) 調査の概要および調査対象は次のようである。

調査にあたって、質問項目の一部を東京都立教育研究所相談部児童生徒研究室（当時）の宮本一史、宮本裕子氏らによる、子どもの「生と死」に関する意識の研究（1983）の項目と重ねさせていただいた。快く了解して下さった宮本一史氏に感謝申し上げる。

本調査の対象は総計3974人、3歳から20歳前後まで。年齢に関して20歳の項だけは19歳から22歳を中心（78%を占める）として50歳代前半までを含む。20歳に対する調査は長崎市内の大学、短期大学、看護学校、長崎市内の公民館で実施した。3歳から18歳までの調査は、長崎市、佐世保市、東彼杵郡、時津町、五島、平戸市、熊本市の、保育園、幼稚園、学童保育所、小学校、中学校および高等学校で、1991年から1995年の間におこなった。

調査方法は、質問紙によって、8歳の一部までは面接法によって、以降の年齢では各自に書き込んでもらった。それぞれの質問に（はい・いいえ）で答えてもらい、「わからない」の場合は中黒に○をつけるように、調査の初めに口頭で指示した。調査者は、筆者、大学上級生、調査対象学級の担任で、特に面接調査の場合は大学上級生、専攻科生に加わってもらった。

註表1 調査対象の年齢別男女構成人数と割合

年齢/人	男子	女子	性別不明	計	男子%	女子%	性別不明%	計%
3歳	26	31	0	57	45.6%	54.4%	0.0%	1.4%
4歳	78	82	1	161	48.4%	50.9%	0.6%	4.1%
5歳	106	103	2	211	50.2%	48.8%	0.9%	5.3%
6歳	126	119	2	247	51.0%	48.2%	0.8%	6.2%
7歳	158	179	2	339	46.6%	52.8%	0.6%	8.5%
8歳	166	174	1	341	48.7%	51.0%	0.3%	8.6%
9歳	102	97	0	199	51.3%	48.7%	0.0%	5.0%
10歳	104	106	1	211	49.3%	50.2%	0.5%	5.3%
11歳	87	80	0	167	52.1%	47.9%	0.0%	4.2%
12歳	85	91	2	178	47.8%	51.1%	1.1%	4.5%
13歳	205	200	3	408	50.2%	49.0%	0.7%	10.3%
14歳	149	147	1	297	50.2%	49.5%	0.3%	7.5%
15歳	191	196	1	388	49.2%	50.5%	0.3%	9.8%
16歳	110	95	1	206	53.4%	46.1%	0.5%	5.2%
17歳	99	66	1	166	59.6%	39.8%	0.6%	4.2%
18歳	44	24	0	68	64.7%	35.3%	0.0%	1.7%
20歳	118	207	5	330	35.8%	62.7%	1.5%	8.3%
全体	1954	1997	23	3974	49.2%	50.2%	0.6%	100.0%

*20歳と表した成年の平均年齢は23.9歳

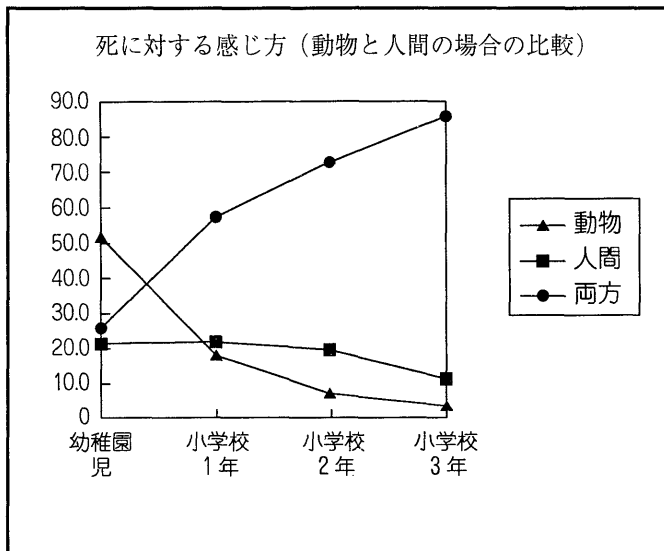
- 2) 調査にあたって、質問があれば、ペット相当の虫との死別経験についても書いていいと答えることにした。
- 3) 上菌恒太郎；子どもの死の判断における年齢ごとのカテゴリの類似性，長崎大学教育学部教育科学研究報告第47号，4頁，3頁，1994年，の図1，表1を参照。
- 4) 上菌恒太郎；死の判断における「常識」，長崎大学教育学部教育科学研究報告第48号，1995年，53頁。図1をみると，12歳が，9歳や20歳に比べて「常識」と思われるような判断から遠いことを見てとれる。
- 5) 大ざっぱに言うと，3，4歳の年齢段階には総体として死の判断基準が明瞭ではなく，6歳で基準を獲得してくるが，それが9歳で明らかに収束し，12歳から多様な意味の方向に揺れると言っているように思われる。こうした点については，前掲，上菌；死の判断における「常識」，53，54頁の図，および，上菌；子どもの死の判断における年齢ごとのカテゴリの類似性，長崎大学教育学部教育科学研究報告第47号，1994年，4頁を参照。
- 6) 宮本裕子，自殺に対する（子どもの）感じ方・考え方，稲村博，小川捷之編；シリーズ・現代の子どもの考える16，死の意識，所収，98頁，1983，共立出版。宮本らの当該の調査は，1981年に東京都の小学校3年生から中学校3年生までに対しておこなったもので，調査項目は2段階になっている。「あなたは，いままでに動物を飼ったことがありますか，ありませんか」，この答えの「ある」に○をつけた人が次の設問「あなたは，自分がかわいがっていた動物に死なれてしまったことがありますか，ありませんか」に答える。（東京都立教育研究所相談部；昭和55～56年度 子どもの「生と死」に関する

意識の研究，資料 調査の結果，27頁)

- 7) 設問は「いままでに、あなたがいっしょに住んでいた家族，身近な人（しんせき，友だち・したい人など）で，なくなった人がいますか」である。（東京都立教育研究所相談部；前掲書，27頁）
- 8) 上蘭恒太郎；死に関する子どもの意識の日米比較・序説，長崎大学教育学部教育科学研究報告第45号，1993年，37頁。この稿では小学生について比較考察した。
- 9) 11頁，1983年3月。以下に示す表および図は，上蘭がまとめなおしたものの。

註表 2 死に対する感じ方（動物と人間の場合の比較）

	動物%	人間%	両方%
幼稚園児	51.2	20.7	25.6
小学校1年	18.2	21.6	57.1
小学校2年	7.4	19.1	72.0
小学校3年	3.4	11.1	85.4



註図 1

- 10) 前掲論文，上蘭恒太郎；死の判断における「常識」，例えば，53頁，図1を参照。
- 11) 上蘭恒太郎；死について子どもたちは誰に聞くか——日本とドイツでの調査研究——，長崎大学教育学部教育科学研究報告第49号，1995年。25頁。
- 12) 仲のよかった動物が死んだことがありますか、はい、いいえ、と、動物が死ぬのと人が死ぬのとどちらがかわいそうですか、動物，人，どちらもかわいそう、とのカイ二乗検定値。以下，動物が死ぬのと人が死ぬのとどちらがかわいそうですか、の場合は，動物，人，どちらもかわいそう、の3項，他の質問の場合は，はい，いいえ、の2項とのカイ二乗検定値を掲げる。